清流劇場2017年3月公演

オイディプス王

Oedipus
the King

世界に起こる
あらゆる苦難の出来事を、
神の手だけに委ねはしない。
たとえ、みじめな姿を
さらそうと、
私は、人間としての
自らの責任を全うする。

Οι δυσκολίες που συμβαινουν στο κόσμο,
δεν πρέπει να αφήνονται μόνο στα χέρια του Θεού.
Ακόμη και αν δείξω μια ελεεινή μου πλευρά,
θα εκπληρώσω τις υποχρέωσεις μου ως άνθρωπος.

AI·HALL 提携公演　芸術文化振興基金助成事業

http://seiryu-theater.jp

20 SEIRYU THEATER 1996-2016

CAST

04

03

02

01

08

07

06

05

12

11

10

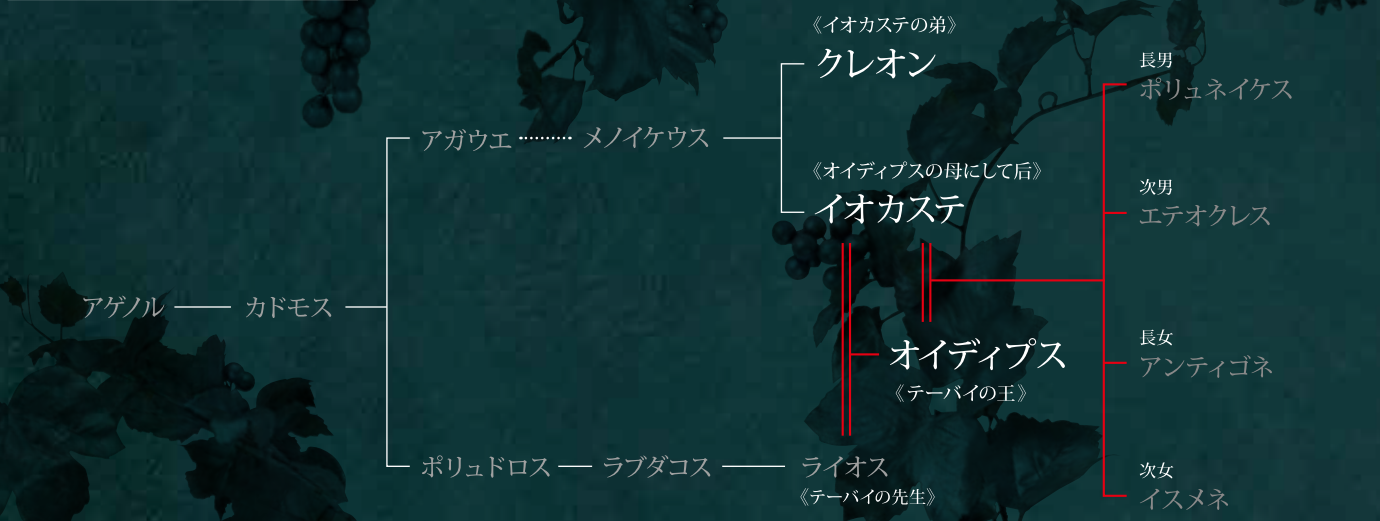
09

01.オイディプス（テーバイの王）…髙口真吾
02.イオカステ（オイディプスの后・先王ライオスの妻でオイディプスの母）…林英世
03.クレオン（イオカステの弟・のち、テーバイの王権を継ぐ）…西田政彦
04.合唱隊長…得田晃子　05.合唱隊長…倉増哲州
06.合唱隊（コロス・テーバイの市民たちからなる）…森和雄・他
07.テイレシアス（盲目の予言者）…上海太郎
08.コリントスからの使者…あらいらあ　09.羊飼い（先王ライオスの召使い）…阿部達雄
10.第二の使者（宮殿内からの報せの者）…鈴木康平
11.テイレシアスを導く子供…ゲタニドゥ・ステファニア
12.オイディプス王の召使い…大野亜希　13.音楽・演奏…仙波宏文

13

『オイディプス王』関連地図

テーバイ王家の家系図



※グレー部分・・・今回上演する『オイディプス王』には、登場しません。

あらすじ

●物語の前の物語

古代ギリシアの都市国家テーバイはカドモスを建国の祖とし、その血筋を受けるラブダコス王家によって治められていた。

ラブダコスの子に当たるライオス王は神アポロンにより、「自分の実の子によって殺される」という神託を受けていた。

ライオス王はイオカステと結婚するが、その間に一人の子供が生まれると、神託を畏れ、その子供をキタイロンの山間に捨てさせ、殺すように命じる。

それから時が経ち、ライオス王は神アポロンの神託を得ようと、従者を連れて、神アポロンを祀ってあるデルポイに出掛けるが、その途中で非業の最期を遂げる。

一方その頃、テーバイでは、スピンクスがテーバイの人々に謎をかけられ、禍（わざわい）に見舞われていた。

スピンクスの謎

「地上に住み、一つの声を持ちながら、朝には四つ足、昼には二本足、夜には三つ足で歩くものは何か。」

この謎を解けず、テーバイの人々は次々と殺され、皆、恐れおののいていた。

摂政を務めるクレオン（イオカステの弟）は、ライオス王の殺害者を捜索するよりも、身に迫ったこの難問を解き、テーバイの危機を脱するために、「この謎を解き明かした者には、テーバイの王位と后イオカステを与える」と、触れを出した。

そこへ通りかかったのがコリントス（都市国家）の王子オイディプスだった。

オイディプスはその優れた知力を以て、この謎を解いた。

オイディプスの答え

「それは人間である。赤子の時は四つの手足で這い、じきに立ち上がって二本足となり、やがて寄る年波に堪えきれず、背は屈み、杖を持って三つ足となる。」（答えは、「自分＝オイディプス自身」である、という説もある。）

これにより、スピンクスは死に、テーバイは禍から救われた。

そうして約束に従い、オイディプスはライオス王の後を継いでテーバイの王となり、ライオス王の后イオカステを妻とした。

やがて、オイディプス王と后イオカステの間にはポリュネイケス・エテオクレス・アンティゴネ・イスメネの二男二女が生まれる。だが、穏やかな平和は長くは続かなかった。

●プロロゴス

テーバイに再び禍が降りかかる。国中が疫病に悩まされ、田畑は作物が枯れ果て、家畜は次々に倒れている。スピンクスの謎を解いたオイディプスは、知恵者であり、人々から尊敬され、信頼も厚い。この度の禍の解決にも人々の期待が集まっている。

舞台はテーバイ、オイディプスの宮殿前。

テーバイの民衆たちが禍からの救済をオイディプスに嘆願している。

オイディプスは威厳と慈愛に満ちた王として登場する。

オイディプス「おお、可哀そうな子供らよ、おまえたちがこのわたしに助けを求めてやって来たわけはよくわかっている、ようくな。（中略）このわたしは国のこと、わたし自身、それにおまえたち、といろいろ気配りせねばならんのだ。」（58-64行）

「人々の苦しみをわたしの苦しみ」と言い、オイディプスは今回の禍に対する処置も既に手を打っている。

后イオカステの弟・クレオンをデルポイに遣わせ、神アポロンの神託を受けてくるように命じていた。

クレオンが神託を携え、オイディプスの元へ戻ってくる。

アポロンの神託（1）：ライオス王殺しの犯人を国外追放にするか死罪にせよ。

クレオン「神ははっきりとわれらに命じられました、この土地にはびこる穢れを国外に追い出せ、成長して不治の病とならぬようにと。（中略）国から叩き出せと、また殺戮には殺戮をもって報いるべしとも、わが国を揺るがせているのはこの血の汚点（しみ）なのだからと。」（96-101行）

クレオンは続けて、ライオス王の殺害現場からただ一人逃げ帰った召使いの証言を伝える。

召使い（＝羊飼い）の言葉：「殺害者は複数」

クレオン「その男の言いますのに、ライオス王は盗賊に襲われた、それも一人ではなく多くの者の手に掛かって殺されたということです。」（122-123行）

オイディプスはテーバイの禍を鎮めるため、神アポロンの神託に従い、ライオス王殺しの犯人探しを宣言する。

オイディプス「よし、その事件をもう一度初めから吟味してみよう。（中略）このわたしも同じだ。この国とあの神とのため、死んだお方の仇を討つ仲間と考えてもらって結構だ。」（132-136行）

●第1エペイソディオン

盲目の予言者・テイレシアス（鳥占い師）が登場する。

テイレシアスの発言：「ライオス王殺しの犯人はオイディプス本人である。」

テイレシアス「今日ただいまよりこの者らにもわしにも、口を利かないでいただこう、不敬な罪を犯してこの国に穢れをなす者ですからな。」（352-353行）

「あなたが捕まえようとしているあの方の殺害者はあなただ、と申しているんです。」（362-363行）

オイディプスの反応は「怒り」。

オイディプスには、召使い（＝羊飼い）の言葉「殺害者は複数」が頭に入っているために、テイレシアスの《オイディプス真犯人説》は耳に入らず、怒り心頭に発する。

テイレシアス「もっと言うてもっと怒らせて差し上げようか。」（364行）

テイレシアスの「父殺し・母子相姦」の暗示と将来の予言。

テイレシアス「さきほどあんたは、ライオス王を殺した者を捜しだすようにと厳しく言い渡されたが、その当の男は、じつはここにおる。元はよその土地からやって来た流れ者という触れ込みだが、いずれ生粋のテーバイ人であることが明らかにされ、苦い運命を味わう羽目になる。目明きから盲目になり、富める身が乞食に身を落として、見知らぬ土地を杖を頼りに流離（さすら）い歩いてゆくことになるのじゃ。（中略）その男は自分がいま一緒に暮らしている子供たちの兄弟でもあり、親でもあること、一人の女の息子でもあり、夫でもあること、父親と妻を共有すると同時に父親を殺した者でもある、ということがな。」（449-460行）

オイディプスはテイレシアスの発言を「暴言」「たわごと」と断じ、これを王室打倒のクーデターと思い込む。そして、自らの右腕と頼むクレオンを首謀者に、またテイレシアスをその共犯者と考え、怒りをクレオンに向ける。

●第2エペイソディオン

クレオンが登場し、オイディプスの誤解を解こうと懸命に訴えるが、オイディプスは意に介さない。そこへ、后イオカステが登場し、オイディプスとクレオンの中を仲裁する。

イオカステはオイディプスの「怒り」を鎮めるため、予言者の言葉など信ずるに足らないとなだめ、「そのちょっとした例を挙げましょう」と、先代の王ライオスに下った神託が実現しなかったことを話す。

アポロンの神託（2）：子による父親殺し

イオカステ「じつは昔ライオス殿に神託が降ったことがありました。（中略）《ライオスはわたくしと彼との間に生まれた子供によって命を落とす運命に

ある》と、こうでした。ところが報せによりますと、彼は異国の盗賊どもの手で三つ叉の道で殺されたということです。一方子供のほうは、生まれて三日と経たぬうちにその両足のくるぶしを合わせて留め、人の手を煩わせて山中深くに捨てさせました。ですからアポロンは、あの子が父親殺しとなることも、ライオスが恐れていた恐ろしい運命を子供から蒙ることも、けっきょくはよう実現させられなかったのです。」(711-722行)

「三つ叉の道」：オイディプスの「怒り」は「不安・恐れ」へと変わる。

イオカステは、神託「子による父親殺し」が成就しなかったことを例に挙げて、テイレシアスの発言を否定したが、それを聞いた、オイディプスには思い当たることが浮かび上がる。

オイディプス「こう聞いたと思ったが――ライオス殿は三つ叉の道のところで殺されなさったと。」(729-730行)

かつて、「三つ叉の道」で人を殺したことがあるオイディプスは、《もしかすると、犯人は自分ではないか？》と、疑い始める。

オイディプスはイオカステに先王ライオスの姿形・年格好、そして殺された時の様子を聞き質し、疑いは確信になる。

オイディプス「いや心配だ、あの占い師(＝テイレシアス)、目が見えているのではないか。」(747行)

アポロンの神託(3)：父を殺し、母と交わる。

オイディプスは、自分の過去を話し始める。

都市国家コリントスの王子オイディプスは若い頃、酒席で友人から「お前は今の両親の実子ではない」と言われる。傷ついたオイディプスは、両親に事情を尋ねるが、埒が明かない。そこで神アポロンへ神託を受けようと訪れるが、神はそれに応えず、代わりに「父殺しと母子相姦」を予言する。

オイディプス「(神アポロンは)身の毛もよだつようなまがまがしいことを告げて、わたしを嘆きの底に突き落とした、わたしは母親と交わり、世にあるまじき子らを人目に晒す、またこの身は生みの父親の殺害者となり果てようと。」(790-793行)

驚いたオイディプスは祖国を捨てて旅に出る。その途中、ポキス地方の三つ叉の道近くで供回りを連れた初老の男(実父＝ライオス王)と道争いを起こし、彼らを殺害した。

一縷の望み：召使い(＝羊飼い)の言葉「殺害者は複数」

オイディプスの「ライオス王殺しの犯人」の可能性を否定できる「一縷の望み」がある。

それは殺害現場から逃げ帰ったライオス王の召使い(＝羊飼い)の言葉「殺害者は複数」が真実かどうかにかかっている。召使い(＝羊飼い)の言葉が正しく、複数による犯行であれば、それは別人によるものとなる。しかし、殺害者が一人であれば、その犯人はオイディプス本人であることが明らかになる。オイディプスは、召使い(＝羊飼い)を呼び寄せるように命じる。

●第3エペイソディオン

イオカステは、狼狽するオイディプスを宮殿内に残し、テーバイの市民のため、穢れを祓うすべを与えて下さるよう神アポロンに嘆願する。

そこへ、コリントスからの使者が登場する。

使者はイオカステに、コリントスの王・ポリュボスが死に、新しい王にオイディプスを迎えたい旨を伝える。

オイディプスが姿を見せる。父の死の訃報を聞いたオイディプスは悼みつつも、「父殺し」の神託があたらなかったことを知り、安堵する。

使者は、コリントスへ戻るように促すが、オイディプスは神託の残りの部分「母と交わる」ことを畏れ、コリントスへは帰れないと答える。

キタイロンの山間(やまあい)での出来事

使者は、オイディプスがコリントス王ポリュボスとその后メロペの実の子供ではないことを明かす。

オイディプス「ではなぜあの方はわたしを子供だとしたのだ。」

使者「貰い子されたのだ、昔な、おわかりか、このやつがれ(＝私の意)の手から受け取られてな。」(1021-1022行)

使者はオイディプスへ、キタイロンの山間での出来事を語り始める。

キタイロンの山間で、ライオス王に仕える羊飼いから赤子を受け取り、ポリュボス王に渡したこと。その際、足のくるぶしを刺し貫いていた留め金を抜いたこと。オイディプス(＝ふくれ足の意)の名がその時の様子に由来すること。

オイディプスは今まで自分を愛しみ育ててくれた両親が実の親ではなかったことに愕然とし、また、生みの親が誰なのか知ろうとする。

イオカステは恐ろしい真相に気付き、オイディプスへこれ以上、自らの素性について詮索しないようにと進言するが、オイディプスは聞き入れない。

イオカステ「この者の言った男のことがどうしました。何も気になさいますな。耳を貸すことはございませぬ、無駄なことですから。」

オイディプス「これほどまでの手掛かりがあるのに、自分の素性を確かめもせず、放っておくという法はあるまい。」(1056-59行)

やがて、この使者へ赤子を渡したライオス王に仕える羊飼いこそが、ライオス王殺害現場から逃げ帰った召使いその人であり、今まさに召喚している人物であることも判明する。

イオカステは狂ったように宮殿へ駆け込んでいく。

イオカステ「お為を思うて申します、せぬのがいちばんです。(中略)ああ、お可哀そうに、素性など、お知りになりませぬよう。(中略)おお、おお、不幸せな方、あなたに申し上げられるのはそれだけ、それ以外に申し上げようもございません。」(1066-1072行)

●第4エペイソディオン

羊飼いが登場する。

「子による父親殺し」の神託を恐れたライオス王と后イオカステから赤子を殺すように命じられたが、「不憫で殺すに忍びなかった」と、赤子をコリントスの使者に渡したことを白状する。

オイディプスは、自分が殺したその人こそ、実の父・ライオス王であり、四人の子供をもうけた后イオカステこそが、実の母であったことを知る。

こうして全ての真相が明らかになり、神アポロンの神託は成就されていることがわかる。

オイディプス「おう、おう、これで何もかもはっきりした。おお、陽の光よ、そなたを拝むのもこれが最後だ。わたしは生まれてはならぬ女(ひと)から生まれ、交わってはならぬ女(ひと)と交わり、殺してはならぬ男(ひと)を殺したのだ。」(1182-1185行)

●エクソドス

宮殿内から報せの者(＝第二の使者)が現れ、テーバイの人々へ宮殿内での出来事を報告する。

第二の使者「われらが高貴なるお后、イオカステさまが亡くなられました。」(1235行)

そうして、報せの者は后イオカステが首をくくって亡くなったこと、また、イオカステの髪留めで、自らの目を刺し貫き、盲目となったオイディプスの惨状を語る。

オイディプスが現れる。

オイディプスは、父を見、母を見ながらそれと悟れなかった無能な我と我が目を我が手で潰している。

盲目のオイディプスは、我が子であり、兄弟(妹)でもある幼子たちの行く末を案じながら、やがて、テーバイから追放されていく。

参考文献
●『オイディプス王』の魅力と上演の可能性
丹下和彦・清流劇場勉強会レジュメ
●『オイディプス王』 福田恆存訳・新潮文庫
●『オイディプス王』読解 山口修司・北海学園大学学園論集

前5世紀のギリシア悲劇

ギリシア悲劇が春3月に都市国家アテナイ（現アテネ）の国家主催の競演会で公演されるようになったのは、前6世紀末（前534年）のことだった。初代の優勝者はテスピスという。その作品は現存しない。

前5世紀に入ってアクロポリス（アテナイの城砦）の東南麓のディオニュソス神の神域に専用のディオニュソス劇場が造成され（その遺跡が現存する）、アイスキュロス、ソポクレス、エウリピデスの3大作家が登場するに及んで、それは古典古代ギリシアの精神活動を担い体現する一大文化事業となった。この競演会は遥かローマ時代にまでも継続されたが、最盛期は3大作家が競作した前5世紀、ことにその後半だった。

完全な形で現存する劇作品は、アイスキュロスが7篇、ソポクレスが7篇、エウリピデスが19篇、合計33篇である。

ギリシア悲劇はディオニュソス神と関係が深い。この神は葡萄の栽培、葡萄酒の醸造技術を司る神で、毎年3月の悲劇上演会が大ディオニュソス祭というディオニュソス神の祭礼に合わせて行われるのも故なきことではない。そもそも悲劇はこの神の事跡を寿ぐ歌ディテュランボスから始まったとされる。時とともに各地の英雄伝説を取り込み筋の変化と内容の充実を遂げたが、しかしそれがいかに進展しても作品の素材はあくまでギリシア民族特有の神話伝承に限定され、その領域を飛び出すことはしなかった。

ギリシア悲劇は仮面劇である。俳優は男優ばかりである。女性の役は男優が女性用の仮面と衣装を使って演じた。この点、本邦の「能」にやや似ている。パフォーマンスの場は野外劇場である。幕はない。舞台装置も乏しい。楽屋らしき建物はあるが、舞台を覆う屋根はないから劇中の夜の場も白日の下で演じられた。

作品は全篇韻文で書かれている。それを俳優たちが朗唱する。現代人の感覚では劇というよりは歌唱劇、オペラに近いものである。

劇の構成は概ね4場から成る。各場の合い間に幕間的なものとして合唱隊（コロス）の歌と踊りが挟まれる。舞台と観客席との間の半円形の広場（オルケストラ）がその場所である。この合唱隊の存在は近代劇に慣れた身には些か特異で、観る側にとっては解釈に困るもの、演じる側にとっては劇場内でどう処理して、観客にどう訴えるか、頭を悩ませるものとなっている。本公演では、皆さんはどう感じられたであろうか。

本篇すなわちソポクレス作『オイディプス王』は、ソポクレスの代表作であるばかりではなくギリシア悲劇全体を代表する名作であるといってよい。さりながら、初演の年次が不明である。前440～430年の頃のいつかであろうとされるが、正確にはいつであったか不明である。ギリシア悲劇にまつわる七不思議の一つと言ってよい。

21世紀のギリシア悲劇

ギリシア悲劇はローマのセネカに引き継がれた。といってもそれは翻訳ではなくセネカ風に書き直された「ギリシア悲劇」だった。後1世紀のことである。キリスト教文化以前の古代ギリシア・ローマ文化が見直されたルネサンス時代には多くの古典作品が翻訳されたが、ギリシア悲劇はその埒外だった。やっと近世近代になって翻訳や書き直しが現われる。『オイディプス王』に限っていえば、コルネイユ、ヴォルテール、ホフマンスタール、ジイド、コクトーらの作品である。本邦では今世紀初頭蜷川幸雄演出による『オイディプス王』上演が注目された。初演以来2400年という長い年月が経つが、その人気は衰えていない。名作であり問題作である。

なぜ現代にギリシア悲劇か。

ギリシア悲劇はギリシア民族に代々伝わる神話伝承を素材として舞台劇化されたものである。そこにはふつうの人間に混じって神・英雄が登場し、動き回り、人間の生活に口出しをし、時には高圧的に支配しようとする。そうした環境の中で、人間は神や英雄と自分との距離を測り、自分が置かれた位置を知ろうとする。言い換えれば、それは人間として生きること、その意味を知ること、その追求である。21世紀の現代に、かつてギリシア人が感じていたような神はいない、かもしれない。しかしかつての神と同じような強い、そして恐ろしい力が、われわれの周囲には、やはりある。そしてかつてのギリシア人と同じように、われわれも生きる途を捜し、生きることの意味を問い続ける。

オイディプスが辿った人生は特異だった、かもしれない。しかし彼が求めようとしたもの、すなわち世界の中の自分の居場所、自分に与えられた位置、生きてゆくために必要な拠点は、われわれの場合とおそらく変わることはない。彼はこの世界における自分の存在を確かめようとして、すなわち自分は何という存在であるのか、どこから生まれてどこへ行く者であるのかを知るために、まず戸籍調べから始めた。現代のわれわれに免除されているものはおそらくこの戸籍調べ一点だけである。あとに続く探索は彼我ともに同じである。しかし戸籍調べが免除されているがゆえにわれわれは探索の手掛かりをどこに求めたらよいのか、それが却って曖昧になっている。オイディプスの迷妄を、われわれはけっして嗤うことはできない。

今回のわたしたちの『オイディプス王』公演では、前5世紀の初演時と同様に、一部ではあるが仮面を使用する。仮面劇に慣れていない現代の観衆に、これがどう捉えられるか。不安ながらも、その効果のほどが期待される。

合唱隊（コロス）の扱いは、これまでも上演する劇団それぞれが随分と困惑し苦労をしてきたものであるが、わたしたちはこれをすべて舞台上に上げ、せりふも複数の隊員に分割して振り分けた。量も大胆に軽減してみた。さて、この結果はどう出るか。

その他、マイクの一部使用、ギリシア語原文の挿入（朗読）も新機軸である。

古代ギリシアと現代日本と、2400年の時空を超えて呼応するものが、はたしてあるかどうか。観客の皆さま方だけでなく、演じる側のわたしたち自身も、おののきながらそれを待ち受けている。

丹下和彦
（大阪市立大学名誉教授・
古代ギリシア文学者）

生きる体温と意識を高める清流劇場の舞台

～結成20周年に寄せて～

「勉強するのが楽しい」。子供の頃、大の勉強嫌いだった私は、こういう言葉を語る級友を訝しんでいた。よい年になってから、やっと気づいた。勉強すれば、脳が喜ぶことに。

最近、清流劇場の勉強会に足しげく通っている(誰でも参加することができる)。公演前に、その戯曲が成立した時代背景や作品の魅力など、様々な角度から学ぶことができる。講師の先生方も、大学教授、俳優など多彩。予備知識なく舞台を見ても楽しめるよう作られてはいるが、知的な刺激を感受してから観劇すると、より深く楽しめ、また今、その戯曲を上演することの意義も見えてくる。

演劇は、社会と接する「窓」であると思う。演劇を通し、現代社会を見詰めることで、自分は国民の一員であり、社会的存在であることを意識できる。価値観の異なる他者とも出会って、一緒に現代の諸問題を考えるきっかけともなる。生きる体温と意識を高める効果があると思うのだ。清流劇場の舞台には、まさにその血流がみなぎっている。

主宰の田中孝弥さんは、劇団結成当初は「手酌」というペンネームでオリジナル戯曲を執筆。名古屋文化振興賞「戯曲の部」佳作を受賞するなど、評価を得ていたが、２００４年から１年間のドイツ留学後は、海外、おもにドイツ戯曲の翻訳上演に意欲を燃やし、現代日本に通底する演出で成果を上げている。特に市川明先生の新訳台本と田中さん演出は、最強タッグだ。もともとドイツ戯曲は、台詞の一言一言が簡潔で詩的、声に出して読みやすく、聞きやすい作品が多いのだが、従来の日本語訳では、一文が長く、理解しにくいケースもあった。ところが市川先生訳では、耳から聞く言葉として、わかりやすい。名訳を得て、知的でありつつも、頭でっかちにならず、パフォーマンスとしておもしろい舞台に仕上がっている。演劇の表現者として、最も大切なところを押さえておられると言える。

さらに清流劇場は、海外にも活動の幅を広げ、２０１１年に韓国、２０１３年にはドイツ公演も行っている。

さて、今回は古代ギリシャ悲劇に挑戦。翻訳の丹下和彦先生の講義も勉強会でお聞きできたが、御造詣が深く、それでいて親しみやすいお話だった。舞台もきっとそうであろうと期待したい。

真実を追究したオイディプス。現代日本に生きる私達に必要なものがきっと見えてくるだろう。

20周年おめでとうございます。長年の研鑽が実りつつある清流劇場の未来を楽しみにしています。

九鬼葉子
(演劇評論家・
大阪芸術大学短期大学部
准教授)

ごあいさつ

古代ギリシアでは、3月下旬から4月上旬の乾期に、大ディオニュシア祭協賛の上演会で悲劇の競演が行われていたそうです。ディオニュソスというのがお酒の神様で、その神を寿ぐお祭りで、ギリシアの市民たちは劇場に集い、一日に3本の悲劇とサテュロス劇(＝滑稽な劇)を観劇したそうです。その時代に思いを馳せながら、2016年度が20周年となる清流劇場で、3月にギリシア劇が上演出来ることを嬉しく思っています。

この『オイディプス王』という作品は、一つ一つのセリフが長く、会話よりも語りに重点を置いた構成になっています。そして、舞台上では何も事件は起こりません。《赤子を他国の人に渡したこと》も《父殺し》も《母子相姦》も《目つぶし》も観客の目の前では起こりません。これらの劇的な出来事のすべては、登場人物たち、つまり俳優たちの語りの中で起こるのです。どうぞ、そのあたりも楽しみの一つにしていただければと思います。

今回の上演にあたり、大きく目立つ演出としては、《マイクの使用》があります。どうして、マイクを使おうと考えたのか、その理由を少しご説明しておこうと思います。本作品『オイディプス王』は悲劇と呼ばれていますが、正確にいうと悲劇詩です。(作者ソポクレスも悲劇詩人と呼ばれています。)つまり、合唱隊が歌い踊る部分(スタシモン)ばかりでなく、俳優が語り所作をする劇の部分(エペイソディオン)のセリフも韻を踏んでいるのです。セリフの部分は概ねイアンボス(アイアンボス)と呼ばれる短長の韻律です。この作品『オイディプス王』全1530行のかなりの部分がアイアンビック・トリメーター(短長(＝弱強)3歩格)と呼ばれる、2つのシラブル短長格(v-)を2つ重ねたものを3度繰り返して1行を構成しています(v-v-|v-v-|v-v-)。

古代ギリシア語で書かれた作品を現代の日本で上演するにあたり、1行ごとにその韻を正確に踏むことは難しいにしても、マイクを適宜使用することによって、シーンごとの大きな括りの中で、短長(＝弱強)格のような形で、そのダイナミズムを感じていただけるような演出を施せればと思っています。

もう一つ、《マスク》を使用します。これも大きく目立つ演出になろうかと思います。ソポクレスの時代の上演は3人の俳優(男優ばかり。女優な存在せず)と15人の合唱隊によって編成されていました。15人の合唱隊は市民の中から抽選で選ばれた素人さんだったそうです。3人の俳優は職業俳優で、彼らがマスクを付け替えることで、イオカステやテイレシアスといった役柄を演じ分けていたようです。

今回の私たちの座組は10人の俳優と3人の特別協力者によって編成されています。そして、今回の演出では合唱隊の方がマスクを装着し、マスクを外すと役柄に変わります。

そもそもオイディプスやイオカステなどの王様や高貴な人たちだけが人間であり、悩んだり怒ったりするのではありません。仕事や生活に追われ、額に汗する私たち一般庶民も人間であり、社会を構成する「市民」です。今回の上演にあたり、合唱隊こそが《マスク》を付け、「市民」という役柄を演じることにより、「市民」という存在について考え、ひいては、現代社会で私たちが「市民の担うべき役割」を考える機会に出来ればと考えています。

本日はご来場いただき、誠にありがとうございます。ごゆっくりお楽しみ下さいませ。

清流劇場　田中孝弥

清流劇場2017年3月公演

オイディプス王 Oedipus the King

原作／ソポクレス
構成・演出／田中孝弥
翻訳・ドラマトゥルク／丹下和彦
出演／林英世、西田政彦(遊気舎)、阿部達雄
髙口真吾、得田晃子
倉増哲州(南森町グラスホッパーズ)、鈴木康平
あらいらあ、上海太郎(上海太郎カンパニー)
音楽・演奏／仙波宏文
特別協力／森和雄、大野亜希
ゲタニドゥ・ステファニア

ドラマトゥルク／柏木貴久子
舞台監督／K-Fluss　舞台美術／内山勉　照明／岩村原太　照明オペ／木内ひとみ
音響／とんかつ　衣装／植田昇明(kasane)　小道具／濱口美也子
写真／古都栄二(㈲テス・大阪)　ビデオ／㈱ワビック
WEB・制作協力／飯村登史佳　宣伝美術／㈱cursor(カーソル：岡田ゆうや)
協力／一心寺シアター倶楽・座・九条・㈲ウォーターマインド・㈲ライターズ・カンパニー
㈱舞夢プロ・イズム・アティチュード・佐々木治己・川口典成・新井真紀
塩見結莉耶・鳩田邦雄・山下智子・森岡慶介・居原田晃司
制作／永朋　企画／清流劇場

公演日程／2017年

3月 9日(木) 19時
3月10日(金) 19時
3月11日(土) 15時
(終演後、アフタートークがあります)
3月12日(日) 15時

＊日時指定・自由席です。
＊会場内での飲食喫煙・写真撮影は禁止です。

◎アフタートーク・パネラー
丹下和彦
(大阪市立大学名誉教授・古代ギリシア文学者)
キタモトマサヤ(演出家・遊劇体主宰)
正木喜勝(演劇研究・学芸員)
田中孝弥(清流劇場代表)

会場：AI・HALL 伊丹市立演劇ホール
〒664-0846 兵庫県伊丹市伊丹2-4-1 TEL：072-782-2000
WEB：http://www.aihall.com/

お問い合わせ
清流劇場　WEB：http://seiryu-theater.jp
E-Mail：info@seiryu-theater.jp

＼メンバー募集／
清流劇場の活動に興味のある方、俳優・スタッフに興味のある方は、劇団まで、一度ご連絡下さい。　連絡先：info@seiryu-theater.jp

＼チェック／
清流劇場ウェブサイトでは、過去の作品のダイジェスト映像や舞台写真を公開しております。是非、ご覧下さい。

作家紹介　ソポクレス(Sophokles, 496～406BC)

アイスキュロス、エウリピデスとともに並ぶ古代ギリシア三大悲劇詩人。アテナイ市郊外コロノスの武具製造工場主の子に生まれ、恵まれた幼少期を過ごす。容姿端麗で俳優を志したが、声が弱く断念。劇作家に転じ、28歳で大ディオニュシア祭の悲劇競演に初優勝する。90歳まで執筆を続け、24回の優勝を重ねた。合唱隊(コロス)を12人から15人に増やし、背景に絵を使用し、第3俳優を設置するなど悲劇の構造に改革をもたらした。123編のうち、残存作品は7編。『アイアス』、『トラキスの女たち』、『アンティゴネ』、『エレクトラ』、『オイディプス王』、『ピロクテテス』、『コロノスのオイディプス』。今日に至るまで西洋文学に、なかでも人間の心を考究する場で、大きな影響力を持ち続けている。

上演にあたって

自分は誰の子か、自分は何者なのか、真実を問おうとしたオイディプスは試行錯誤の後、残酷な真実に到達します。「父殺しと母子相姦」です。彼は自分の犯した罪を知り、自らの手で両眼をつぶします。何度か見え隠れしていたヒントに気づけなかった「未熟な知」を自ら罰したのです。そして、放浪の旅に出ます。
しかし、オイディプスは死にません。この厳しい運命を背負い、生き続けるのです。彼が選択した「生きる」こととは、たとえその苛烈な運命が神に与えられたものであったとしても、それを神だけのせいにするのではなく、一部でも、人間として自分が引き受けようとする行為です。そうすることによって、彼は「人間として世界に存在の証しを立てよう」とするのです。このオイディプスの姿に私たちは「人間としての崇高さ」と「真実に向き合う人間のあるべき姿」を見るのです。
翻って、ボク自身はどうなのかと考えます。昨年の日本は熊本地震や記録的豪雨などの大規模災害に見舞われましたし、相模原では凄惨な事件もありました。原発事故処理もまだまだ道半ばです。海外を見渡せば、テロ事件が頻発し、シリア内戦は停戦の糸口さえ見えません。苦難の出来事はあらゆる所で起きています。
――自らの「未熟な知」に対峙しきれないでいるボクは、すぐに誰かのせいにしてしまいたくなるのですが…。世界に起こるこれらの出来事の原因と責任を、すべて神や、他者に委ねるべきではないのかもしれません。「運が良かった」とか「悪かった」とか。「世の中というのはこういうものだ」とか「アイツが悪いんだ」とか。運命や他人のせいにせず、理性や知性でもって、世界をとらえ直すこと。ひょっとすると、そういうことの中から、より良い社会を形成していく上での課題が見えてくるのかも知れません。自分を人間として、この世界に存立させること。一人一人のそうした行為の積み重ねから、真の民主主義社会も形成されるのかもしれません。

――田中孝弥

神託(劇中で使用しているギリシア語)

―神託Ⅰ―
「今は担いがたき苦難も正しき道に添うて行くならば、
やがて、すべては幸いに終わるであろう。」
Όταν σκορπιστεί το κακό μπαίνουν στο δρόμο το καλό τα πάντα.

―神託Ⅱ―
「この土地にはびこる穢れを国外に祓え、
成長して不治の病とならぬように。」
Να διώξετε το μίασμα της χώρας που θρέφεται σ΄ αυτή τη γη.
προτού θεριέψει και δε σηκώνει γιατρειά.

―神託Ⅲ―
「罪びとを国から追い出せ。血には血をもって報いるべし、
わが国を揺るがせているのは、この血の汚点なのだから。」
Στέλνοντας εξορία το φονιά ή ξεδιψώντας ο φόνος
με φόνο αλλιώς η πόλη θα πνιγεί σ΄ αυτό το αίμα.

―神託Ⅳ―
「お前は母親と交わり、世にあるまじき子らを人目に晒す、
またその身は生みの父親の殺害者となり果てよう。」
Με τη μάνα σου θα σμίξεις και θα φέρεις παιδιά της ντροπής.
φονιάς του πατέρα σου θα γίνεις.

―神託Ⅴ―
「子が親を殺す」
Το παιδί θα σκοτώσει το πατέρα.